

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（特別研究）

研究代表者 所属・職名 自然・生活教育学系・教授

氏 名 小高 さほみ

研究期間 平成29年度～平成30年度

研究プロジェクトの名称	特別な配慮を必要とする子供たちに着目した 学校改善に関する研修の研究
研究プロジェクトの概要	本研究プロジェクトは、「インクルーシブ教育」の制度等が充実していく中で、学校現場で「特別の配慮」の捉え方が固定化され、「周辺化されがちな子ども」（例えば、外国につながる子ども、性的マイノリティ、家庭に難しい事情を抱えた子どもなど）が困難な状況に置かれていくのではないかと、そもそも「特別な配慮」とは何か、なぜ、ある子どもたちを焦点化し、形容するのか、という問いが出発点である。日本の「特別扱いしない」学校文化や「不可視化」の知見や実態を踏まえて、構築主義の観点から、「特別の配慮・対応を必要とする子供たち」にかかわる研修のアクションリサーチを行った。
研究成果の概要	<p>議論を重ね、実施した研修の内容・方法は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 「社会的な困難や不利（貧困、障害、外国籍などによる）を経験している子どもたち」・公開勉強会（映画上映、講演と実践報告、意見交流） 2) 「文化的背景の異なる子どもたち」「ALTとの関係構築」・講演会 3) 「家庭に難しい事情を抱えた子どもの家族関係や生活世界」・合評会 4) 「どのような子ども包摂する学校」・映画上映会&みんなの学校Café 5) 「教員の自主的な研修の企画運営」・研修スタッフの振り返りの会 <p>これらの実施過程で明らかになった主な課題は、以下の4点である。「周辺化されがちな子どもたち」—①の生活世界および歴史的・社会的背景の理解不足、②が直面する困難な状況を想定することの難しさ、③をマイノリティとしてみなすマジョリティの無自覚、④の支援に関わる学校内外の協働や連携の困難さである。これらの課題を乗り越えるため、「特別な配慮・対応が必要な子ども」—①の具体的な実践事例に基づく対話を重視した研修プログラムの開発、②を包摂する学校や地域の実践に基づく教員の自主的な学習組織の育成を試行した。また、「特別な配慮・対応が必要な子ども」に焦点化した教員養成課程の授業の必要性も明らかになった。</p>
研究成果の発表状況	<ul style="list-style-type: none"> ・菅原至・原瑞穂・堀健志・小高さほみ、平成30年度上越教育大学免許更新講習【選択必修】「周辺化されがちな特別な配慮が必要な子どもを含めた学校・学級運営」開講 ・小高さほみ・菅原至・原瑞穂・堀健志『特別な配慮を必要とする子供たちに着目した学校改善に関する研修の研究』（平成29～30年度上越教育大学研究プロジェクト報告書）
学校現場や授業への研究成果の還元について	「特別な配慮・対応が必要な子ども」の理解と支援に関する研修プログラム構築の一助となるよう研究成果をまとめた報告書を公開する。開発した研修プログラム案を取り入れた自主セミナー開催、免許更新講習を開講する。教員養成課程の授業や現職研修向けのテキストの企画を進める。